

## 「近現代の真宗をめぐる人々」 第14回

おぐるすこうちゅう  
(小栗栖香頂 [1831-1905])

かつて近代仏教学を確立した南条文雄は「今や私は西洋に業を修め、師は東洋（中国）に大法を伝えた。地は東西に分かれるが、[……] 真宗の教興という点では全く同一である」と語っている。この師こそが幕末から明治期にかけて大谷派を牽引した小栗栖香頂に他ならない。小栗栖は大分県妙正寺で生を受けた。少年時代から咸宜園に通い漢詩・儒学に傑出し、師である広瀬淡窓からもその明晰さを絶賛されたほどである。22歳に東本願寺学寮に入寮するが、父・了堅の言葉をかたくなに守り、俱舎から入り、法相・華嚴・天台を修学し、そして真宗の奥義を極めた。八宗兼学である小栗栖の主たる専門は真言密教であった。このことが契機なのか、彼にはユニークなエピソードがある。中国の上海へ渡るに先立ち、教部省事務のため1873年に長崎へ赴いた。その時期の長崎は少雨に悩まされていたため、小栗栖は長崎の仏教界と共に雨乞いの祈祷をしたとされる。真宗人として型破りな行動力であろう。

晩年、小栗栖は中国布教のために『真宗教旨』を刊行した。それを読んだ中国居士の楊文会は、仏教の衰えについて「中国は禪宗にあり、日本は浄土真宗にあり」と明かし、真宗を批判した。以来、小栗栖と楊との間で激しい論争が交わされたことは有名な話である。小栗栖亡き後、近代の中国仏教者である芝峰法師は、彼の事績を「教の為、人の為に尽くした龍象の日本僧」と讃えている。国際色豊かで、かつ真宗教化に身を捧げた小栗栖の姿は、そうそう真似できるものではない。2025年に没後120年を迎えようとしている。

(藤村 潔)

